

誰のための正義（緒方貞子氏の思い出）

小池誠一（IGNITE 機構）

戦後国際社会で最も活躍した日本人として緒方貞子の名前は必ずあがります。昨年10月に92才で死去された際はロイター、AP、BBCなど世界のメディアがその死を速報し、改めて国際的な評価の高さを実感しました。緒方さんと直接やり取りをした時に、国際機関のトップを務めた等の地位や役職ではなく、緒方さんが世界で評価、尊敬される国際人としての真髄に触れることが多々ありました。今回はその一つを思い出として紹介します。

ICC（国際刑事裁判所）を知っていますか。国際社会で最も重大な犯罪である集団殺害（ジェノサイド）、人道に対する犯罪、戦争犯罪を犯した個人を裁く法廷で、裁判をするだけでなく、捜査や追訴を独自の判断で行える検察機能も有しています。2002年にその根拠となるローマ規程が発効し、その活動を開始しました。ただ、日本は未加盟のままの状態が長く続きました。2006年12月に超党派の議員からなるPGA(Parliamentarians for Global Action：地球規模課題に取り組む国際議員連盟)の日本支部の議員連盟が日本政府のICC加盟を後押しする目的で、PGAの世界総会を東京の憲政会館で開催することに尽力しました。そして、その開催挨拶を緒方さんに依頼しました。

ICCをはじめとした、国際機関のトップと世界59ヶ国から140人を超える議員が集まるようなクラスの会合では、冒頭のスピーチは通常日本であれば首相、つまり国のリーダーでないと務まりませんが、開催の目的から首相が登壇する訳にはいきません。緒方さんであればその国際的な知名度からも遜色はなく、また、ルワンダの虐殺や、フセイン政権によるクルド人への人道犯罪の結果生じた大量の難民を保護した人物であり、会合のテーマに最適の人物でした。緒方さんが冒頭の挨拶で彼女の経験と見識を通じ、ICCの重要性を訴えてくれれば会合は最高の形でスタートが切れます。人間の安全保障の担当をしていた私は、議員連盟の幹事の先生との事前調整と、当日の緒方さんへの同行をすることになりました。会合のテーマは「ICCと人間の安全保障」ですが、緒方さんにスピーチを受けてもらうために人間の安全保障をテーマに加えたとの裏話を主催者から聞きました。

緒方さんは自分のスピーチ原稿を他人に作成させることはなく自分の言葉でスピーチを行います。緒方さんがスピーチ原稿を準備しているときに、めずらしく呼ばれ、ウガンダ北部内戦の現状、和平交渉の最新状況を調べるよう指示を受けました。ウガンダでは1980年代後半より政府軍と北部の抵抗勢力との内戦が勃発し、特に90年代以降、Joseph Kony 将軍が率いるLRA（神の抵抗軍）は戦力維持のため当初の支持基盤であった北部の村を襲い、6万人以上といわれる子供を誘拐し兵士や性奴隷にしていたことが発覚し国際的な問題となっていました。2006年8月に政府軍との戦闘停止合意がなされ和平交渉が開始されたものの、ICCがKony将軍を人道犯罪で起訴したため、和平合意を結んでもKony将軍は逮捕されることが確実となりました。一方で、LRAは和平のための合意の条件としてICCの免罪を条件としたため、和平交渉は頓挫しLRAの虐殺行為は継続され被害が連日のように起こっている、その現状を緒方さんに報告しました。その時はなぜこの件を自分に調査させたのか意味が分かっていませんでした。

PGA世界総会の当日、緒方さんと会場に入るとただ者ではなさそうな外国からの参加者が引切り無しに緒方さんのもとに挨拶に訪れているのを見ました。全員の挨拶が終わらないまま開会の時間となり、緒方さんは登壇しスピーチを開始しました。私は原稿を見ていなかったのですが、人間の安全保障の観点から緒方さんの経験も踏まえICCの意義や重要性について説得力をもって述べる素晴らしい内容で成功裏に終えたと思いきや安堵しました。ところが、終わらずに「最後に、」と言い私に調べさせたウガンダの現状を話しました。そして「ウガンダで起きている現実にICCはどう向き合うのですか。ICCの求める正義とは何でしょうか。そしてそれは誰のた

めの正義でしょうか」とのメッセージを残しスピーチを終えました。私は何故この場でこの話をするのかとびっくりしました。それは私だけでなく多くの参加者が思ったでしょうし、特にこの総会を苦勞の末に日本での開催にこぎつけた日本の議連の先生には立場を失うと思い、一瞬青ざめた方もいたと思います。緒方さんの真意はわかりませんが、このメッセージからは「ICC が重大な犯罪者を裁くのは将来において同様の犯罪が繰り返されるのを抑止するためであり、ウガンダの事例は ICC の活動が今の人々の犠牲を生み続けることになっており、手段が目的となり真の目的を見失っていないか。ICC の求める正義は人々のためにあるべきで ICC の存在意義のためになっていないか。」と解釈したのは私だけではないと思います。

この様な場ではスピーチを終えると同時に予め準備していたように同じ調子の拍手が一斉に鳴り響きます。この時は拍手が起きるまで確実に間が空き、最初は気のない形式的な拍手がパラパラと一部で起こり、次にごく一部の場所で感動したといわんばかりの激しい調子の拍手が起こり、これらが交錯しながらも次第に感銘の拍手が優勢となり、最後は感銘の拍手が憲政会館を埋め尽くしました。この時の私の気持の動揺と拍手の様子は十数年経った今でも記憶に蘇ります。ICC を支持、協力するために世界中から東京に集まった総勢 180 人を超える要人を前に喧嘩を売るようなメッセージを聞いた時には「何故この場で」と肝を冷やしましたが、最後に満場の拍手を聞いた時には「ICC を支持する要人が集まったこの場だからこそその問題提起」と理解できました。ただ理解はできても常人ではできない行動で、緒方さんが国際的に名声を得る一端が垣間見ました。国際社会にとって真に必要なものに対しては恐れず行動を起こす人で、“村度”とか“予定調和”とは別の次元で生きていた人でした。

今回の話題に関連して、その後の話をフォローしておきます。

一つ目は日本と ICC の関係ですが、この会合の後 2007 年 7 月に日本政府は加入書を国連に寄託し、同年 10 月 1 日に 105 番目の締約国として正式な加盟を果たします。加盟後は日本人を判事とし送り込む等積極的に活動しています。

二つ目はウガンダ北部紛争についてです。2012 年米国の NGO が現地を訪問し被害者への取材記録と実録画像をもとに「Kony 2012」という映像を作成しインターネット動画サイトにアップし、LRA の Kony 将軍を逮捕し裁くべきというキャンペーンを行いました。掲載後の 1 週間で You Tube で 7,300 万回、Vimeo で 1,650 万回再生され、世界中の有識者や一般市民がこの運動に賛同し、ソーシャルネットワークが世界を動かしたはしりの事例としても大きな注目を浴びました。しかし、ほどなくして、この動画を観たウガンダの紛争地域で被害に苦しんだ多くの人々がこのキャンペーンの中止を訴え、この大きなうねりはあっけなく消えました。ウガンダの人達が何故反対したのでしょうか。大きな理由は真実の姿を反映していないという主張でした。LRA の非道行為は事実ですが政府軍も LRA 同様に子供を少年兵に仕立て、現地で略奪と殺戮をおこなっていたという事実があり、地域の住民は反政府勢力と政府との両者から被害を受けていたもので、政府に都合のよい内容だけが世界に配信されていることが許せなかったのです。映像を作り運動を起こした NGO もまたそれに共感し活動を起こした多くの人々もそれぞれが正義を求め善行に動いたのですが、現地の人々の反対の理由がわかると、運動に参加した人々の間で一つの問いかけが共有されました。自分たちの運動は「誰のための正義」だったのかと。2006 年の PGA 世界会合で緒方さんが問いかけたのと同じ言葉が時を隔て SNS というより広い世界で一般の市民の間に蘇ることになり、私は見えざる筋書きがあったのではないかという思いになりました。

今現在、世界のあちこちで国を揺るがす国内問題や或いはコロナへの対応を巡って、SNS 等の場で異なる立場の正義と正義の意見が対立したり、正義とそれと距離を置く冷笑主義（シニシズム）の意見とが激しく対立している状況が頻発しています。誰のための正義で何のための正義か、正義の本質を見極めることがより一層求められる時代になっています。

（終わり）